

故郷の土
に水を觸れ

専門家の
缺點

身に變化を及ぼすことは明かである、此の理よりして、田舎より東京に來れば、水の變化よりして脚氣を生ずる、けれども、此の脚氣たるや元來水が原因して居るのであるから、元の水に親しめば直ちに治る、昔より脚氣は故郷の土を踏めば治ると云ふのも、斯う云ふ次第である、又一つには田舎は空氣もよいから次第に病氣も治ると斯う云ふ説であつた。

「以上の説を聞けば流石は専門家だけあつて其の通りであると素人は一途に思ふであらうが或は思ふのが正當かも知れぬ、然ながら、今日の専門家として、小兒欺しの様な淺薄なことを能くも口外することが出來たと思ふと、余は實に情けなく感ずるのである、以上は専門家の脚氣に對する、轉地の概説であるが余は經驗上是の消極的説を排斥し次の様な積極的解釋を敢へてするものである。

持て餘し
轉地を
動む

「吾人は疾病の悪性、若しくは快復困難なる時に於て醫師は藥物其の効なきと認めたる時、或は効なきに至りたる時に、轉地療養を勧むることあり、即ち都會は空氣或は水の不潔にして不適當なるを以つて、空氣は水の清淨なる、海岸又は山地、温泉等の田舎に至りて療養すべきを勧めるのである、兎角醫師は自から持て餘して、匙を投出したる時は直ちに轉地を云々と其の責任を脱れやうとするのである。

其地に
矢張り同
病者あり

「成程醫師の勧むる所は空氣清淨にして疾病の治療さるゝこと速なりと雖も、吾人は只此の一事を以つて満足するものではない、何となれば、醫師の勧むる其地、果して病氣の起らざる地かと云へば事實は之に反して、其の土地にして矢張り同病者の在るを認めれば只に空氣水のみ勢にて治療さるゝものとは到底信ずることが出來な

るのである。

「以上は徒らに物質的方面に捕はれて精神的方面を没却したるものである、更らに心理的に其の作用を述べて一層明らかならしめんとするのである。

「例へば此處に一人の患者ありて、醫師より貴君の病氣は、東京の様な空氣の悪い所に居ては何時迄経つても全快の見込が立たないから、一時空氣のよい海岸へでも氣樂に轉地療養をした方が宜ろしいてしやう、と一つの暗示を與へらるゝ、此の場合には種々なる世人の口より、轉地のことも聞かせられ自身にも亦醫藥の効、顯著ならざるに飽き／＼して居る折柄とて、醫師の轉居なる語は、偉力なる暗示となりて轉地すれば治ると云ふ信念を胞かしむるのである。

比較的慢性の疾病者は常に家に在ることが多く家中に在れば普段

見るもの聞くものも同一物にて何等慰安となりて氣の慰むべきこともなく寝ても起ても病氣のみを氣にする、心配するから病氣は益々重くなる、重くなるから、氣になると云ふ風になるのである、是れが今轉地せんとして家を一步出て見れば、早や何となく、氣が晴れ／＼する、殊に東京驛にでも著けば、久方振りのことにて今更の様に心機一轉して、今迄家の中に「くしやく／＼」して居た氣分は、正反對に樂觀的となり、やがて汽車に乗る、驛を發車すれば、早品川大森と海を眺めて、自然に親みて心身はいと走快に何時しか目的地に到着するのである、到着すれば今迄家に在りたる時に比し、海邊の眺めに増一増の快感を覺え、毎日美しき自然に感化して、全く病氣の事等を思ふ餘有なく寢遊の如く幾日かを經過するのである、此間新陳代謝は休みなく順往し、今迄氣にされて患部に停滯勝であつ

た血液も心機一轉して氣血の調和が出来、今は何の邪魔するものもなく大車輪に活動され、何時の間にか快復さるゝのである。
『所謂、病氣は昔より氣血の滯りと言へる様に、氣を矯制すれば血液の循環を能くすることも亦容易である、余は此の意味に於て、轉地とは云はずして、即ち轉氣と稱ふるのである、而して氣質を鞏固に保つ時は、如何に不快の中に起居活動しても猶ほ何等身体に變化を來さぬのである。』

例へば本所、深川邊の勞働者の如き、或は鑛山工夫の如き常に塵埃飛散し、不潔甚だしき所に在り、猶を比較的、衛生を重する上流家庭より明かに壯健なる事實を以てしても、精神作用の如何に影響すべきかを、立派に裏書するものである、又醫師は水云々と言ふが東京邊りの様に完全なる水道の水が、如何に變ればとて左程に悪影

響を及ぼすべき筈もなく、却つて田舎の田甫などにては鐵氣水、濁り水等を常に使用して至つて壯健なるを思へば醫師の言と全く矛盾すべき事に氣付くのである。

則ち田舎より都會に出て、脚氣等に比較的多く罹るは、運動不足より生ずる消化不良に原因するものである、田舎より出でたる時は大食の風定まらずして、俄かに運動のみ不足を生じ、食慾と消化作用の不一致より起るものであるが、其の地に永く住みて永く運動に適合すべき食物の攝制を守るに至らば胃は壯健となりて疾病の著しく減少し、後には全く同病を斷つに至るのである。

要するに余の主張せんとする處は空氣水等に對する轉地を絶対に認めぬのではないが、敢へて轉地を要せずとも、心理作用によつて轉氣する時は自己の力を以つて悠に治することが出来るのである

如何に轉地をなすとも、心配其他の煩悶等の轉氣なくして病氣の治癒さるゝものではない、畢竟轉地は轉氣を容易ならしむるが故に療法としては共は稱勵すべきであるが、常に修養自覺して行往座臥機に望みて時に應ずる轉氣法を活用せしむるに如くはない。余は最後に轉地は、直接醫藥を離脱したる、精神に伴ふ自然の化學作用で靈の司ることは心靈學者の等しく認むる處なりと概括して精神療法と云ふにあるのである、但し水の身体に影響することは共に認むるのであるが水のみを原因とは認めぬのである。

加持祈禱

世が文化に赴くに從ひ、舊式の總べては頽廢されて行く、此の祈禱の如き加持の如きも亦然りて、日を追ふて迷信なりと侮蔑さるこ

とは事實が証明して居る加持祈禱等は各宗教又は遺傳とて多種多様である、然れども之等は悉く暗示及感應の二作用の結果で、自己に必ず治る、又相手の疾病をも治すと云ふ強き觀念の起る方法でさへ、あれば其の方法手數等敢へて問はざる所である。

又催眠術によれば、一種の催眠とも云ふ、今若し此祈禱其のものに依つて疾病を治癒するものとせば、何人が行ふも、被祈禱者は一立一体に治療さるゝ筈なるに、世人の昔より靈顯、著るしき祈禱を受くるも何等其の効顯なきは如何なる理由か疑はざるを得ない、然しながら加持祈禱等も心理的方面より觀察するに於ては意味深張にして悔り難きものもある多くの信仰者は無意識に、其の効顯も度外視して、徒らに祈禱を受くるのみである、忌憚なく余に言はしむれば、之れを持って遊びて世人を瞞着せんとするの多きを觀るのである

信仰心
観念

昔より、孝子、忠僕等の、三七の間信願を込め其の意志を貫徹せしめ親或は主君の病氣を治癒せしめたることは吾人の既に知らる、通りである、此の信仰心とは神とか佛とか、種々の崇敬統一を計るに足る目標を定むるのであつて、祈禱の如きは一つの手段で、精神統一の方法に過ぎないのである。加持の如きも、例へば誰之れは何々の呪業を能くする、彼の人に呪つて貰へば必ず治ると云ふ強き信頼に富み感愛性を滯びたる時行へは出鱈目の真似にても治すことは明らかである。

又小兒の轉るびたる時、坊は強い、坊は強いから泣かないね——あ、坊は御利口だ、どれ〜なんともない、もう治つた、と云ふ風に暗示を與へれば餘程烈しく打ちたる時と雖も、無邪氣なもので平氣で居るものである。

小兒は無
邪氣

痛い
と云
へば直ぐ
泣く

小兒の心
理作用

父を絶対
に信頼す

若し此の時連れて居る者が消極的觀念を起し、あゝ大變とばかり坊や痛いでしやう、此所が痛いので彼處が痛いのだ、自から先づ泣き面すれば痛くもないやつを無理に泣かして心配し、遂には之が因襲となりて些細なることにもベソをかく至る、之等は一般の例であるが、余の修養者にして小兒の病氣したる時最初一二度、さあ坊やー御出でとうちやんが氣合を掛けてあげると直ぐ治る、それはもういたくない坊やは強い、もう治つたと云ひつゝ、暗示を與へて靈動摩擦療法を施して二三喝氣合掛ければ大抵の病氣は即座に治る。

「次には之れが先入性となつて、父ちゃんに氣合を掛けて貰へば治ると云ふ正直の觀念よりして治療の真似をして一喝よしもう治つたと云へば直飛んで遊ぶと云ふ實例は珍らしくない、實際に應用してゐる家庭では悉くと云つてもよい程である、詰り、小兒は父以上

具有せる
自然力

に信賴すべきものは他に絶對にないと云つてもよい位で、如何に大勢の悪者が攻寄せるともお父さんが居るから大丈夫だと云へば、夫で安心するのである。

「丁度」呪業などは相手さへ眞面目で感受性の程度に因つて効を奏すること此の小兒の如く敢へて不思議ではない、只茲に心理的精神作用の大なることを没却してはならぬ。

法術は吾人の具有せる自然力

法とか術とか靈力とか云へば、其の眞相を極めずして直ちに迷信となし、或は不可思議呼はりをするのであるが、抑々も病癩の治癒さるゝは決して不思議のことも無い、亦神秘的のこともない、寧ろ治るのが當然で、病に罹るのが不自然である。

自から
不思議
と云ふ

山師を
神
と敬ひて

各人異な
る唱へ方

然るに、病氣と謂へば自然に罹るかの如く思ひ、亦病氣に罹れば永年の因襲的傾向に依り、醫藥療法に因らねば治癒せぬもの、如く只管念ひ込んで居るものが「ヤット」一喝されて其の病氣が治つた、只手が觸れたのみで痛みが去つた、病氣が癒つた、等と只不思議だ神秘的だと云ふ、亦之を良し事にして、吾れは何の法なり、彼は何々術だの妙法だのと盛に振れ廻はし、宛然、自己獨特の所有なりとして漫じて居る療法家が尠なくない。

「斯の如き療法家は、自から其の眞理を知らぬものである、然るに斯る療法家を恰も神佛の如く信賴して名譽も財産も貞操も弄ばれて猶有難がる連中も亦尠なくない、従つて斯る療法家を信賴したる結果大なる失体を招くに至ることが在る。

「今若し此所に五人の行者ありと假定し、其の行者の行ふべきくじ

自覺無きが故に

の切り方、及、唱ね方等は一人一人異なるのである、此の故に考量すべきは斯の五人の行者中五人共悉く異なる形式を採るならば六人の行者も亦同じ七人も十人も二十人も各異なる法を用ひた結果は同一となることになる、此の理よりして進んで一層深く考ふる時は一人一人個々別々の形式を採つて出来るならば、斯する所如何なる方法手段たるも敢へて問はざる事となるのである。

「是れ等の行者は只此の唱へ事をなせば火の中も煮返る熱湯も感じない病氣も治ると云ふ精神を統一すべき手段で何等自確を要せざるを以つて刹那の間に於て機に應ずることは出来ぬ、其の唱へこと又はくじを切らなければ單純なる一事と雖も成し得ないのである、然るに精神の自覺に依る時は、斯る迷ひ事を唱へなくも行者の行ふ事は自由になし得るのである。

自己を自覺せよ

「而して此の精神の自覺を根本的に修めんとせば心身の修養自覺に俟つの外はない、此の修養法に就いても多種多様であるが余は老幼男女何人を問はず、數日間にして會得せしむるのである、或は素人が考ふるに一日に二時間餘一週間位を以て果して修得することが出来るか、否やとの疑問を生ずるのであらうが、余は吾人相互の具有する自然力を解發自覺せしむるのみなれば寧ろ一般的に行はれざるを不思議と思ふのである。

道は近き事に易き

「吾人は自から具有せる自然力を不思議とし不可解とし自然界即ち宇宙の心靈と別視して自から及ばざるものと、消極的解釋をなす故である、所謂、道は近きに在り、事は易きにあり、然るに之を遠きに求め、弱きに得んと欲する、その如くである、或は、天高しとする勿れ地を離、即ち一尺なれば天の如く吾人の、一息は天地間を

意思的
根性を離
れよ

順往して吾人に環り、吾人即宇宙である、吾人は、自然の造化に依つて與へられた現象であつて、宇宙構成の一分子たることは一點の疑ふ餘地もない、して見れば常に不思議と思ひしことも、自然界の或る現象なることを認識せば、自然界と不離不則の關係を有することの吾人に會得さるゝの容易なるは敢へて不思議でもない、況や世に行はる諸奇蹟的事實は吾人の氣付かぬ間に行ふ事實を意思の發動に基きて行はしむるに過ぎぬのである。

第五編 實 驗 (附 録)

余は心身の修養により人類の先天的靈力を一般に自覺せしめ、以つて、之を社會に活用せんとするのであるが、如何に實際的且つ合理的に説明し吾人の領づく處ありとも、眞の力を確信せんとするには、先づ如何なる程度迄耐へ得るかを自から試めさんとするのである、之に對するに左の實驗の二三を以つてするのである、故に實驗は、已れの靈力を驗めす爲めの實驗にして、目的の爲なる實驗に非らず是れ余が實驗に捕れざらんことを慮ふる所以である。

靈 動 術

姦通を
夢見て
女房を殺す

「或る觀念が心中に強く起つた時は、不知不識の間に、之に伴ふ運動を起すものである、此の運動を稱して、觀念運動と云ふ。

例へば御嶽の行者など御弊を捧げて一心不亂に教を讀みて念する時は、御弊の柄は動かさずして、御弊の先きのみ微妙に震へ出すのであるが、行者にして之迄の業をなすには相當に長事月を要し、其の間非常なる苦行を爲したのである、則ち水行、斷食、或は登山、四足禁食など嚴守するのである。

然るに此の觀念運動の原理を極むれば、何人も即座に斯の動作を顯はすことを得るのである、今其の實例を二三示せば。

「例一」十六日午前六時半頃大阪府下泉北郡横山村、天滿繁太郎「三七」は突然同衾中の妻すみ「三セ」を玄翁で撲り付け重傷を負はせて殺し自分も玄翁で頭を撲りつけ瀕死の重傷を負つた、三橋分署員が取調べ

主人の死
夢見て毒

ると同人は妻すみが他の男との姦通を夢みて嫉妬を起し突然此兇行に及んだものだ。(東京日日新聞掲載)

「例二」二日午後九時半芝區金杉町一丁目一、桶屋職、松崎忠次方の雇人茨城縣生れ、奥村榮藏(十六)は就眠中主人の長男榮造(十三)が死んだと夢見たものか突然、ガバと跳ね起きるや、「自分も榮吉さんの跡を追つて死出のお供を致します」と言つ、便所に駆け込み毒藥を服して苦悶中家人に發見されて手當中死亡した。(東京日日新聞掲載)

「此の記事を見て或は迷信呼ばりをなすもの、若しくは狐狸の祟り等と大騒ぎをなすものもあるが、一の例の如きは妻すみが平素其の男に對する或る行爲を繁太郎に目撃され絶えず疑ひの目を以つて監視されつゝ、ありたるに偶々當日に至りて一増嫉妬を起すべき事實ありて、怒り心頭に撒し強き觀念となりて、忘るゝことなく眠りに

環り間敷
行き平素の
行ひ

就きて意識の静止さるゝや、強き観念は潜在識の活動となりて姦通を幻覺し無意識中に狂行を敢へて犯したるものである。

「又第二の例の如きも、平素主人の長男榮吉に對する責任観念の大にして、若し過ちあらば吾れも共に……との忠實なる精神より出でたる、潜在識の活動に外ならぬ「観念の部参照」是れに依つて吾人は一度強く観念したることは必ず潜在識の活動となりて、動作の上に顯はるゝことを確心された筈であるが、今此の理に依つて靈動術の方法を解かんとするのである。

先づ静座瞑目して心氣を落ち付け、兩手を前方に差し出して掌を合し、兩腕に力を入れて伸ばすと同時に此の兩腕は必ず開くと強く観念し、臍下丹田にも「ウンど」力を入れる。

此の力を入れる時は、實習の際述べたる如く、胃を凹まし、お澱

を引締める。然して腕の力を抜き自然に放置する時は漸次左右に兩手は開き充分開きたる時は、亦内に附着すと強く観念すれば、敢へて意識を用ひずして終に附着す、亦兩腕を張りて兩手を合せ置き瞑目して静かに呼吸をなし、此の合せたる兩手は前後或は上下に動く強く観念すれば、暫くにして動搖し、遂に前後又は上下に大活動をなし、五尺の体軀は恰も護謨鞆の如く憚みて飛び上る之れを稱して靈動と名付くるのである。

「若し此の状態に轉じ得ざるものあれば、最初意思的に動かし盛んに繼續する時は、自然潜在識の活動となりて終には自りてに活動を繼續するに至るものである、何れも第二編の實習を充分に行ひたる後なることを要し徒らに實驗を急ぎて捕はるゝ事なき様注意すべきである。

是は不思議と

婦人でも此の大力

強直竝に金剛力

次に金剛力に就いて述べやう、一體普通人の到底持上ぐることの出来ない重量の物を婦人と雖も容易に支ふる力量が出ることは、一般人から見ても或は不思議の感を生ずるかも知れぬが、一度會得したる後は此の力が出るのが當然で出ないのが不思議である。

「例」吾人は火事場の状態を思ひ出して感ずる處があらう、彼の時婦人にては男子の動かす事さへ自由ならぬ大きな物を容易に持出して、鎮火後再び持ち運ばんとしても、動かすことさえ叶はぬことがある、然るに心理的方面より説くならば容易に解決されるのである先づ其の最初火事、見たる瞬間に於て、彼の火事は何處其處なり、而も其の場所は自己の親籍の在る處である、と斯う氣がつくと、さ

火事は親籍

猛火の中へ飛び込

あゝ大變で妙しも早く行つて品物の一つも出してやらうとの強き觀念が起る、此の觀念と同時に以後は無意識統一の状態に移りて潜在意識の活動となる、元來此の潜在意識は精神の分折の處に述べたる如く意識の様に判断力を有しない、故に怖いとか、熱いとか、重いとか或は善惡を色別する能力を有せぬが爲めに、其の火事場に向ひても普通走ること能はざる危険の途も、飛び乗り得ざる速度の電車にも飛翔の如く飛び乗つて火事場に着くのである、火事場に着いても普段ならばよりつくことの出来ない猛火の中へも飛び込みて、彼れも此れも無我無中で品物を出す。

此の時に今述べたる如く既に潜在意識の活動なる以上は此の品物は自分一人にて持てる、或は此の物は持てぬと云ふ判断能力は無いのである、従つて貴重品と不用物の同所に在る場合も、無中で其の善

不用物は
持出しは

完全なる
支配力

実験の方
法

悪を選定する事の出来ない爲め却つて不用物を大切に持出すなどの骨稽を演ずることは既に吾人の認めらるゝ處である。

「斯の如きは精神力の自覺なきが故に、火事と云ふ非常なる暗示の爲めに意識を奪はれて潜在識のみの活動となりて最初の品物を出してやらうのみで後は無我無中に活動を爲すのである、而して余は斯の如き状態を稱して氣違ひの動作と云ふのである。

或は催眠術の如く催眠中に術者の暗示に依りて動かさるゝなどは自己に取りて何等認むべき心なく多人の実験材料となるのみである。茲に至つて余は常に意識を忘失することなく、完全な色別支配能力を有して猶ほ是等の實驗をなし得らるゝ事を切望するのである。

「物を持ち上げる時には其輕重に拘らず常に應用し平然として活用さるるに至らなくてはならぬ、それには先づ臍下丹田に「ウン」と力

二本指で
大人二人
を持ち上

人橋を作
りて大人
七人

を入れ腹で持つ様にすればよい例へば二本指で大人を持ち上げる等も、両手の二本指と下腹に全身の氣力を込め肘を突張り、左右より土踏すの下に入れ指で持ち上ぐるることなく腹で持ち上ると觀念し腹に力を入れて腰を伸ばす様にすれば二十貫位は何でもない、又妙し研究すれば一本指でも容易に出来る、會員中には二本指で大人二人を持ち上げる者も尠くない。

「次に強直であるが、仰向けになりて、両手を腰の兩側に附け、口繪の如くにし臍下丹田を中心として、頭以外は全身に力を入れ五十貫や百貫の重量が乗つても決して曲らぬ、決して重くないと觀念して身体を充分伸す時は、全身に力が出でて強直となり、人橋を作りて大人の六七人位上つても何とも感じない。

「此等の實驗を爲す時も、觀念したる後疑心を懐く様ではいかぬ、

唯勇氣を出して、平氣でさへ居れば譯なく出来る、其他力に關することは腹部を中心として觀念を應用することに因るのである。

血液靜動法 (刺針術)

『疾病の氣血の滯りとは古より傳へられて居る、然るに今日に至つては科學にのみ捕はれ或は氣血の調和を唱ふることありても兎角科學の力に依らんとするのである、然れ共吾人は敢へて科學の力を俟つことなく、自己の精神力に依つて之を自由ならしむる事を得るのである、第二編に述べたる如く、余は氣と血とを一體と看做するのである。』

『則ち吾人は身体の一部に血液の循環せざる箇所あらば、其局部に限りて如何に抓るとも一向に痛痒を感じぬことがある、然るに血液

の漸次流通さるゝに従ひ、感覺も亦快復さるゝに至るのである、之れを言ひ換ふれば、血液の循環さるる箇所に感覺あり、血液の循環されざる部分には感覺なしと云ふに期するのである、故に氣と血とは相共に巡應し一体であると稱するのである、今觀念に因つて精神の統一を計りて之を自由になるならば、又氣血の調和を計ることも容易である、所謂、精神作用に依つて血液を左右することである、此の理よりして吾人は身体の一部に或刺戟を受けて苦痛を感じる時は「其局部は腫れ上りて益々痛みを感じる」とある、例へば打撲傷に付きて観るに最初打撲けて「ハッ」と思ふ刹那に精神は統一して局部に集中さるゝのである、精神が局部に集中さるれば、氣血は一体なるを以て、其の局部に血液も多く滯る理由になる、血液の多く滯る箇所は、自然氣になる、氣になるから血液は滯ると云ふことに

大なる針

疾病療法

恐怖心

なる、以上は常に吾人の経験せらるゝ通りである此の精神力に依つて血液を支配することの實驗には、吾人の身体の或一部を切りて通常血液の流れ出るを觀念力にて止むるのである。

「又或は大なる針を刺通しても血を止めることが出来るのである、此の場合血液を止むる程度の觀念力を有する者は、身体を切るも、針を刺すも、何等痛痒を感せぬのである。

余は疾病治療並に、眞の精神作用を吾人に自覺せしめんとするのであるが、或は吾人は僅か二時間位五六日の期間に到底験得不可能との説を爲す者が多數であるが、其の容易に可能なる實例を示して然る後方法を説明せんとするのである。

「例」吾人は獨り夜路を歩行する事があらう、其の時比較的淋しき場所にて不意に物音がした場合或は其他種々なる刺戟に依つて突然

ハツト思
へば顔色
變り

實修の方
法

吃驚した時には強き恐怖の感情によりて、顔面蒼白となりて恰も死人の如き相貌を爲し又若き思想の男女等の不意に出合ふ時は「ハツ」と思ふ間に相方の顔色眞紅になるなど、是等は常に不知不識にして刹那の間に精神作用に依つて血液を上下して居るのである、又患者の如きも或る刺戟に因つて俄に高度の熱を發したなど悉く自己の精神作用にして、吾人の日常に行ひつゝある幾多の事實を以つてしても氣血の變化を証明するに足るのである、此の様に吾人は如何に無自覺とは云へ容易に行ひつゝあるのであるからして其の方法を會得すれば即座に應用さるゝのである。

「丹田集力」と其効果に就いては繰り返へし説明を加へたるを以て、直接實驗の方法を述べることにする。

「先づ臍下丹田に「ウン」と氣力を集注し局部の氣を腹部に引付け

氣力を腹
に

る様にするのである、例へば腕に針を刺すには先づ下腹に力を入れて、此の針を刺しても決して痛みを感じない、血も出ないと云ふ強き觀念を起して充分丹田に氣力の充ちて腕の氣を腹部に「スウート」吸入れる様な氣持ちになりたる時は、氣と共に血液も自然と運行を停止する血液循環停止する時は針を刺しても血の出ぬ道理である、血液の止まつて血の出ない様になれば痛みを感じぬ事は明かである

劍の刃渡り及梯上りの法

「此の方法は希望者に對し從來傳授し來つたのであるが、實社會に處して餘りに奨勵すべき必要を認めぬのである、其の効果に至りても山師的に唱ふれば或は大に吹聴して世人を僞らんとするのであるが、余は單に恐しき白刃に對する恐怖の觀念を去りて、之に動せざ

奨勵すべ
き必要を
認めぬ

膽力を得
る

物理的に
深して

中心

る膽力を覺得し、常に此勇氣を活用して處世上に應用し自他を益せんとするにある、而して此の白刃の何故に切れたくなるかとの學者の説と對照して明確なる吾人の判斷を得んと欲するのである。

「余は一日物理の専門大家に對して、余等の白刃に上りて切れざるは如何なる理由に因るかとの説を求めたのである、大家曰くそれは物理的に解釋して最も容易である。

「元來物體は物理の原則なる中心を保てば非常に軽くなるものである、假令白刃たりとも此の原則に因つて中心を保持する時は三ツ子でも出来る、それを愚人は法なり術なりと鼻を高くして居るのは聊か我輩には受取れぬと、聊か余を侮辱した風があつた。

余は暫くして、斷然と言つた、單なる中心の一事を以つて三ツ子も出来るならば、物理と生命を共にせる大家なればと實驗を求めたの

生命を共に

學者に同

眞の中心

經驗上正當なり

であるが、口に唱へても自信力なき爲め、まあ〜と、始の元氣は所處へやら失せて了つた。

「此の時余は此の學者に對して寧ろ非常なる同情を寄せざるを得なかつたのである、即ち二十ヶ年近くも多額の學費を消費して學びたる此の學者にして然も此の矛相せる説をなせるに於てある。

而して余は斯の如き説を主張するものである。一体物理なるものは、學者の如く中心を保ちて軽くなるとは眞理に當らぬもので、余の所謂眞理とは、中心を保ちて物體は軽くなるのではなく、重くならぬと云ふのである、例へば此所に拾五貫の物在りとして、今其の物の中心を持ちて支ふる時は矢張り十五貫の目方であるが、一方の端を持つて支へんとするには中心を失ひたる結果、先きに持上げたる物も再び持ち上げる事を得ざるのである、即ち後には中心を失ひ

白刃にて頬を引く

足を切る

たる結果、先きに持ち上げたる物も、再び持ち上げる事を得ざるのである、即ち後には中心を失ひたる結果先きに十五貫の物も二十貫の割合となりて持ち上らざるに依る結果である、吾人は此の理を以つて經驗上正當とせらるゝであらうと思ふ。

「或は白刃を頬に當て、相當に力を入れて引くも異狀を來さぬは中心の一點にては解決を得ること困難と云はねばならぬ、所謂、精神力の偉大なる作用を要する所以である。

又余は曾つて研究中、如何に中心を保つとも、臍下丹田に氣力の充實せざる時は、其の都度、足の裏を切つたのである、或は吾人の中には、興行的奇術と同視して其の劍は及止めがしてあるなど、疑問を起せ者も在る様であるが余は如何なる時に於ても吾人の示されたる名力あらば其儘實驗をなすのである、又口繪の如く大人を脊背

劍の梯上

氣足下に
在る時は

精神力を
試めずに

ひて白刃に上るなど或は梯上りの如きは到底中心等を完全に保つ事能はざるのである、但し中心を失はざることに注意すべきは必要である、要するに躰下丹田に「ウン」と氣力を込め、劍に對する恐怖心の非らざる時に靜かに上る時は、何人も過ちあることなく、若し氣足裏に在る時は、中心を保つと雖も足を切り、或は切らざるも痛みを感じて上る事能はざるのである、然るに相當に修養を積むに従つて、白刃の上に飛び上り、飛下り又は大人を背負ひて容易に上り劍數本を立て、刃の上を渡ることも出来るのである。

熱湯及熱火を防ぐ法

「此の二法は自己の精神力を試す爲に若しくは過らて熱湯熱火に觸れたる場合其の傷害を防止せんとするに應用して効果あるものである。

るが、徒らに自から進んで湯火に觸れる必要な性質上、吾人に強いて勤むるものに非ずと余は認むるのである。
則ち其方法に依つて只熱湯も熱火も熱くないと觀念するのみにて刺針に述べたと同様に局部の神經を丹田に轉換せしめて、血液の局部に集注して復作用を起さしめぬ様にするのである(刺針の部参照)

感應術

自己の意
思を他に
通ず

感應と宇
宙の靈波

「精神感應に就きては第三編に實例を擧げ詳細に説明したる如く宇宙間に感應ありて、一方の意思他方に通ずる事を認識し得るならば「斯の感應性の天地間、殊に人類間に及ぼす所の大なるを想像するに難くないのである。

「則ち」甲の意思強き觀念となるときは、宇宙の靈波によりて、比

較的關係の深き且つ感受性に富める「乙」に感應することは夢其他の例に因りて明解した通りであるが、再三反復せし如く感應は自然界を網羅し萬物平等なるを以つて「乙」意外に感應することあり。

例へば無線電信電話の實驗に因つて觀るも「甲」の發信は空中電波に因つて目的たる乙に達すると同時に、亦空中の波動は能く乙意外の丙丁其他の受信機にも及ぼすものである。

此の無電の作用と、吾人の感應とは何等差異あることなく何れも一滞に相通するものである、獨り人類のみならず、人と他の動物の間にも同様なる感應は認むる事が出来る。

例へば彼の犬馬の能く人心を看破する等の如きは其適例であるが此處には目的とせる人間にのみに止め、最も余の言はんと欲する其の効果を述べんとするのである。

「吾人は既に精神感應の實在と理論とを明かにし之を誠得せられたのである、今此所に一人の惡思想を起す者ありとせば、此の單純なる、一惡思想は應て全宇宙に影響することは感應に因つて明らかである、之と反對に一善思想の起るも亦能く人類悉くに善感するものである、則ち之を想へば吾人は假初にも惡心を起す時は偉大なる自然の感應により、敢へて示さず、語らずして人類悉くを惡化せしめたのである、又之に反し假令僅少なりとも善念を起す時は、自から言はず語らずして、一般を善導したることとなる。

釋迦及基督の教に曰く、苟にも他人の物を欲しいと云ふ心を起さば、自から手を出だして盜らすと雖も、立派に罪を犯かしたることゝなる」と誠めてあるなどは此の感應を言顯はしたものである。

「以心傳心とは昔よりの言葉で、朱に交れば赤くなり、水は方圓の

人ば善惡の友に因

親に勝る大惡氣

相手の黨實を看破

器に従ひ人は善惡の友に依るとは感化則ち感應を意味したものである、例へば一人の惡人ありて、惡事を働くこと久しふして、良心の苛責に斷へざればとて今更ら他の正業を求むる氣にもなれず惡事は已れ一代にて是非共子供は正業に就かせたいとて惡事は絶對に子供に覺られぬ様になしたるに、其の子成長の曉は、親以上の大惡黨となるなど所謂、以心傳心の感應に外ならぬ、之を以つて之を觀れば單純なる一思想と雖も其の及ぼす處の大なるを想へば、苟にも惡心等を起してはならぬ、是れ則ち精神感應ある所以である。

故に精神感應は、不知不識の間にしても斯の如き作用あるを想へば、之れを自覺する時は他人と接する瞬間に於て感應に因り能く相手方の氣質を看破して、之に應ずるは、社交上最も機微を穿てるものなれば今其の方法を示さんとするのである。

修得實修

思念者の深澤

虛身平氣

感應の修得には第二編の實習を専心に修め然る後に試みるを良とす、最も講習中は二日目乃至三日目に初歩を感得し通常實験を爲すのであるが、本書のみに依るものは、第三日目以後に行ふこと、して決して急いではならぬ、猶ほ靈動を體驗したる後を最好時と定むるのである。

「扱て實習を充分行ひたる時は、先づ思念者を選ぶのであるが、此の思念者は觀念力に富める眞面目なる者が良いのである此の思念者は已れの左に位置せしめ、思念者の右手にて已れの左手に軽く觸れしめて、例へば前ならば前、後ならば後に已れを歩かせんとの強き觀念を起さしめて、下腹に力を入れさすのである。

「かくして己れは虛身平氣となりて何事も考へず、自然に放置する時は懸て已の身体は前或は後と一方の思念者の意思に従ひて傾く様

に引付けられる心地がする此の時は殊更に已の意識を活動せしむることなく、身体の傾くに從ひて、身を運ぶ時は思念者の意思に一致するのである、茲に左手を執るとは感應の進歩して物をも取らせんとするに當り右手は使ひ能き爲である。

「元來此の思念者は意思の強固なることを必要とし、被術者にして必ず自己の觀念通り動かさずんば強まざると云ふ勇往邁進の氣力がなくてはならぬ、又術者も意識を以て加減するが如き事あつてはならぬ。

凡そ此の精神に基きて事心修行する時は、遂には手を離して他の意思通り活動し又他の意思をも感得することを得るは容易である。

以上の實驗は只此の實習を眞面目に行ひて、實驗に捕はるゝことなく躰下丹田に氣を落ち付け徐ろに試みる事、肝要なれば全編熟讀

の上玩味すべきである。

其他瓦割、壘割等一切の氣合術及靈的現象は悉く丹田統一に依る

觀念應用である。(以下省略)

世の爲め

病みて能
かとなる

發心の一言を残して

「吾人は既に全編に涉りて熟讀せられたる上は、人類の等しく享有せる、此の大自然力を認識せられたのである、然る上は之を最も有益有利に、自己は勿論一般社會の爲めに活用し、意義ある人生を創造せねばならぬ。」

「人は病の爲めに苦しみて、或は不治と悲しみ、己が悪癖は生れ性、又は移傳性なりと、自から定めて之れを改善せんとするの意思もなく、求めて死致に陥らんとするは寧ろ愚かと云はんより哀れてある。」

「則ち健かなるが故に病あり、病めるが故に健となる、惡あるが故に善あり、善あるが爲めに惡ありとは再三繰述したる宇宙の眞理である。」

ある。

「試みに彼の植木を見よ、桃は其の種子より生じて桃となり、桃に櫻花を見ず、亦、櫻に桃實らず、是れ則ち各本性あるが所以なり、然るに桃に櫻を接木して櫻花咲き、櫻に桃を接ぎて桃實る、無心の草木にしてまた斯の如し、所謂法の本法に法なし、不法の法亦法なり、と、絶對の絶對なるものを認めず、或は、牛の飲みたる水は乳となり、蛇の飲みたる水は毒となる、の、此の一水にして復々斯の如し。」

「況して萬物の靈長たる人類にして、一度起心以つて貫かんとするに何の難差あらん。」

桃に櫻
咲き接
實るに

一度起
心何の
難差あ

成せばなる、成さねばならぬ、何事も

成らぬと云ふは、成さぬなりけり

終

昭和十五年十月廿日印刷
昭和十五年十一月五日發行

心靈現象治病法奥附
定價金壹圓五拾錢也

版權所有
著作權登錄
不許複製

著作發行人

心靈學研究會

右代表者

東京市神田區神保町三の十一
眞 繼 義 太 郎

發行所

東京市神田區神保町三の十一
日本佛教新聞社

電話九段三八一一番
振替東京五九三四五番

無代進呈

一千餘點の佛教書籍佛畫佛像佛具類總目錄
右宛ハガキにて御申込み次第、無代進呈す

409
121

終

